

生／性を拘束する情動のポリティクス

Carlos M. Piocos III,
Affect, Narratives and Politics of Southeast Asian Migration
(Routledge, 2021)

西尾善太

本稿は、2021年2月に出版されたカルロス・ピオコス著 *Affect, Narratives and Politics of Southeast Asian Migration* (London: Routledge) の論評である。フィリピン研究の共同出版のため「親密性」概念の再考を行っていた評者にとって、本書は現代フィリピンの抱える歪みとその脱出困難な状況を理解するための重要な導き手となった。そのため、2022年3月からピオコス氏が東南アジア地域研究研究所(京都大学)に滞在することを聞き、若手のフィリピン研究者を中心に声をかけ、「コロニアリティと社会的実存」研究班で書評会を嬉々として準備した。移民労働者の文学や映画を扱った本書がなぜ評者を魅きつけ、他のフィリピン研究者に共有するまでになったのだろうか。

本書は、香港とシンガポールにおけるフィリピンとインドネシア女性家事労働者を題材とする7本の映画、1冊の写真集、9つの短編と2つの小説のテキスト分析から構成されている。マニラ首都圏で人類学的なフィールドワークを行ってきた評者がテキストと表象を扱う本書に魅かれた理由——まさにそれが本書の学術的意義でもあるが——を説明しておこう。フィリピンという国と社会は現在のグローバリゼーションと新自由主義的な政治経済体制の申し子といえるほどよくフィットしており、その要因の一つがローカルな価値体系にあると評者は考えていた。「親密なつながりが人びとの生存を支える」というモラルエコノミー的社会像は、資本制に抗するオルタナティブとしてフィリピン研究で繰り返されてきた。たしかに個人主義、自己責任、企業家精神といった西洋的社会診断が現在のフィリピン社会に当てはまらず、また実質的に福祉制度が脆弱ななかでも共に生き延びる人びとの姿は、日本を含む社会の経験する隘路に異なる可能性を提示するかもしれない。だが、こうしたローカルな価値体系自体が現在のグローバリゼーションや新自由主義と共犯関係を結んでいたらどう

だろうか。生存を支えるための価値や規範が自らの生を売り飛ばし、搾取的な状況を強化し続けるとしたら。ピオコスによる本書は、フィリピン社会とグローバリゼーションのあいだで結ばれたこの残酷なつながりを情動という概念から解き明かしている。

情動 (affect) は本書をつらぬく最重要概念である。先述した「つながり」「親密性」「価値体系」もこの情動概念の内部に位置づけることができる。かれのいう情動とは、だれかの心身の内深くに在るのではなく、メディアをとおして流通する記号であり、ときに資本とともに流動しながら人びとの皮膚に、また権力構造に貼りつく粘性の液体のようである (Ahmed 2004: 45)。サラ・アーメッドの情動概念に依拠するピオコスの議論は、日本における情動理解と少し距離があるかもしれない。人文地理学者ナイジェル・スリフトやジル・ドゥルーズ (さらにはスピノザ) から影響を受けたブライアン・マッスミなどの議論は、情動を無媒介性と非表象性に注目して概念化し、生の根源的次元を捉えようと試みてきた (cf. Massumi 1995; Thrift 2007; 西井・箭内 2020)。現前の水準における情動概念は、規範、人種、宗教など強固なカテゴリーを越境する可能性を捉える。だが、ピオコスの議論は、むしろ表象の水準において情動が身体と経験を拘束する事例を掘り下げる。本書の情動とは、本来は薄っぺらなタグにすぎないさまざまな言葉がカテゴリー／表象としてちからを持つモーメントに注目するものだ。そのため、社会のなかを流れる情動は、人びとの身体に多面的な影響をもたらし続ける。こうした情動のいくつかは、そもそも社会に内在していたものであるが、国家や資本は、この情動に介入することで政治的経済的な利益をうみ出している。本書で取り上げられるフィリピンとインドネシアは、ともに世界中の先進国へ家事労働を担う女性たちを輸出しており、もちろん女性たちは経済的社会的上昇のために国境を越える。しかし、それだけではなく、その越境に意味や価値を付与する情動の布置のなかをかのじょたちは移動するのだ。情動は規範として人びとがその生を理解し制御することもあれば、かのじょたちを見えないちからで押さえつける情動の構造に立ち向かうための足場ともなりうる。本書は、第一に情動の管理が国家間でいかに実施されているのかを解き明かし、第二に女性たちのあいだで情動によってより従属的な主体へと変わっていく契機、さらにそれに抵抗する契機の両面を論じる。評者の専門であるフィリピン地域研究の文脈から本書の内容を紹介しよう。

第一のポイントは、本書の前半部にあたる一章で詳述される。本書が取り上げる家事労働という職種はいかに情動の管理下に置かれているのだろうか。家事労働はサービスとして親密さを求められるためホームの一部として包摂されるが、その実いつでも使い捨て可能な排除の論理が家事労働者の居場所と帰属を基礎づける。本書は、部外者としてアンホームに置かれ続ける絶対的排除を「計算されたもてなし」 (calculated hospitality) と概念化する。家事労働者の居場所と帰属は、マクロレベルでも同相であり、かのじょたちはどれだけ社会の再

生産に必要とされ寄与しても所有権や市民権を有する社会の正員として認められることはない。親密性というケアサービスの本質を採取しつつも、同時に政治制度的な外部に置く資本のロジックのために情動の部分的包摂と排除が動員されているのだ。

第二のポイントは、こうした制度的な排除がいかに関わり出し国の規範や価値体系、それを利用する国家との関係にあるかという点にある。フィリピンを扱った四章では、フィリピン語で「自己犠牲」を意味するサクリピシヨ (*sakripisyo*) と「新しい英雄」を意味するバゴン・バヤニ (*bagong bayani*) の言説を取り上げている。この二つの言説は、海外フィリピン人労働者を国家建設に駆り立てる道徳的規範であり、かのじょらを使いやすい柔軟な労働者に造り変え、定期的に送金する従順で責任ある人間へ躰ける。なぜなら、フィリピンの歴史において自己犠牲の言説が社会的承認と深く結びついているためだ。たとえば、英雄ホセ・リサル、独裁政権に抗して殉教したベニグノ・アキノ・ジュニアなど、自己犠牲の精神はフィリピンにおける共感と共苦を奮い立たせるナショナリズムの支柱であった。しかし、著者が指摘するように、かつて支配や圧政に抵抗する基盤となった道徳的規範は、情動がグローバル経済に取り込まれることで不平等や搾取をうみ出す装置にもなっている。国家による自己犠牲と英雄という言説は、フィリピン人労働者の苦しみをより大きな利益を追求するための不幸だが必要なコストとしてパッケージ化し、苦しみこそがより良い未来を予感させる。国家は、苦しむ人びとへの同情と共感的連帯の感情を喚起し続けることで、労働者に危機や死が迫ったとしても、それ自体が海外就労の崇高さを人びとにさらに再確認させるのだ。この危機と未来像との関係は、ローレン・バーラントが指摘する残酷な楽観主義 (*cruel optimism*) である (Berlant 2011)。労働者の輸出政策は、自己犠牲という言説をとおすことで一時的で不安定であっても発展と近代化への願望を保持させ、出稼ぎ者の経済的楽観主義として苦しみの受け入れと和解を引き出しているのである。

こうして情動が資本制を稼働させる潤滑油となる側面を掘り下げると、本書はこの排他的な情動の布置から政治的な覚醒へと向かう可能性も論じている。二章では、「計算されたもてなし」による監視・管理メカニズムに抗する女性たちのセクシュアリティの実践へと議論は拡大する。居場所と帰属を奪われたかのじょたちは、身体に対する排他的な政策やスティグマに晒されながらも、他の移民男性や同僚の女性労働者と恋愛生活を送る。こうした性行為は自らの身体を取り戻し、喜びと欲望を通じて自身の主体性を発揮する方法なのである。「積極的に親密さを追求することによって、かのじょらは香港やシンガポールで単なる家事手伝いとして名づけられることを超えて、自分たちのセクシュアリティを表現」している (p. 48)。親密圏を奪われたかのじょたちは余暇を公園、ショッピングモールなどの公共空間で過ごし、公共空間の内部に親密圏を築くのである。著者は移民先でのロマンスについ

て同国出身の男性以外（他国出身の男性や同性愛）に向かうテキストから自国の性規範から離脱するセクシュアリティの可能性をみている。かのじょたちを移民へと追いやり身体を拘束する自国の規範でも、また自らを労働者として排除する移民先のホームでもない実践として、映画 *Sunday Beauty Queen*（2016年）¹における「クイアなホームメイキング」（pp. 70-2）は注目に値する。主人公ダディ・レオは、香港で10年間にわたり美人コンテストの運営に携わっている。レオは、雇用主に恵まれ自分の部屋を借りることが許され、パートナー・ジュディとともにクイアな家づくりをしている。この実践においてふたりは、香港の他のフィリピン人移住者の父と母としてアンホームな社会の最中で「家族」をつくり出す。ダディ・レオが組織する美人コンテストは、他者の親密圏の一部に埋没させられ、いつでも使い捨てられてしまう人びとに自己自身をその美しさと尊厳とともに表す場を創り出している。レオとジュディは、ストレートなカップルを模倣しながらも、かのじょらの関係性が様々なアンホームの経験のなかでお互いに真のホームを与えることでセクシュアリティのステレオタイプを覆すものになっている。

本書は、ローカルあるいは土着の価値体系という地域研究や人類学的研究が安易にオルタナティブを求めがちな対象が現代の資本制と結びあやうい関係を明示する点で非常に有益な議論を提供している。しかし、アーメッドやピオコスの情動における表象への着目は、情動における現前を見えにくくする。たとえば、サクリピショという自己犠牲にしても、1970年代から90年代前半までの左派の運動において人びとを結ぶ重要な概念であった。こうした過去の運動との関係は、本書が描く表象としての情動では切り捨てられている（cf. Tadiar 2009）。また、現前における経験の痛みや苦しみがすべて自己犠牲の言葉に回収されてしまうわけではなく、テキストではない対面関係では別様の相互理解も生じうるだろう。情動における現前と表象、つまり present と represent の関係は、コインの表裏のように一方が見えるとき、もう一方を隠してしまうのだ。その点では、本書は人びとのあいだを行き来する記号として情動の表象面を緻密な解像度で描き出すが、一方、現前の出会いでうまれてくる交流を十分に汲み上げていない。だが、こうした本書の問題点は、情動的転回（affective tern）を受けた多くの研究が現前の可能性に注力しているため、その学術的意義を減ずるものではない。

さて、最後に本書の意義、つまりフィリピン研究や情動概念を用いる研究動向に与える意義を整理しよう。第一に、情動とは政治や経済、社会的なカテゴリーから無垢な存在ではなく、国家によって囲い込まれたり、メディアによって操作されたりしうる。たとえば、新自由主義は市場と道徳のカップリングからなっており、排他的なポピュリズムだけでなく、排斥される移民も別様な情動の布置に置かれていることを本書は示している。第二に、こうし

て記号となり感染する情動の理解のうえで、わたしたちは他者との出会いや対面状況における現前が情動をうみ出す批判的重要性に気づくことができる。「自己犠牲」の例に戻れば、本書では十分に論じられてはいないが、ピオコスとは別の論考において移民労働者による家族への送金を差し控える「送金ゼロ日」(Zero Remittance Day)の運動を取りあげている(Piocos III 2019)。この運動は「自己犠牲することを自己犠牲する」(sacrificing sacrifice)ことで、移民を搾乳牛としてしか扱わないフィリピン国家に送金以上に自分たち自身に価値があることを示す結束と集団行動を示している。表象として囲い込まれた情動=自己犠牲、つまり家族からの規範や国家による義務と承認、そうしたもろもろの情動的な布置を変えるために自分たちと未来の移民労働者のためにサクリピショしようと呼びかけている。こうした運動は、情動をふたたびかれら／かのじよらの現前からうみ出そうとしているのではないだろうか。そして、このうまれ変わるサクリピショがふたたび人びとのあいだを流れはじめるとき、情動は別様な可能性を拓きうるかもしれない。本書が明らかにした表象の水準における情動の領域だけではなく、現前における情動のうねりが表象をどのように変容させ、その波はいっけん強固に見える表象の布置をいかに揺るがしうるのだろうか。表象と現前のあいだの往還が本書の議論をさらに高めるためには不可欠である。本書がフィールドにベッタリと張りついていた評者のような人間に刺さり、また日本の他のフィリピン研究者のあいだでの交流を促していったことは評価されるべき点である。良き本は、その内容に価値があるだけでなく、そこからうまれてくる応答の響きにこそ価値が見出されるべきであろう。

注

- 1 バビー・ルース・ビララマ監督による映画 *Sunday Beauty Queen* は、香港で2008年にはじまった家政婦が主催する美人コンテストを追ったドキュメンタリー。また Youtube から無料で視聴可能 (TBA Studio 2020)。

参考文献

- Ahmed, Sara, 2004, *The Cultural Politics of Emotion*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Berlant, Lauren, 2011, *Cruel Optimism*, Durham; London: Duke University Press.
- 西井涼子・箭内匡編, 2020, 『アフェクトゥス (情動) ——生の外側に触れる』京都大学出版会.
- Massumi, Brian, 1995, “The Autonomy of Affect,” *Cultural Critique*, 31: 83-109.
- Piocos III, Carlos M., 2019, “Suffering that Counts: The Politics of Sacrifice in Philippine Labor Migration,” *Humanities Diliman*, 16(2): 26-48.
- Tadiar, Neferti X. M., 2009, *Things Fall Away: Philippine Historical Experience and the Makings of*

Globalization, Durham; London: Duke University Press.

TBA Studio, 2020, "Sunday Beauty Queen (2016)," (Retrieved February 19, 2023, https://www.youtube.com/watch?v=TB_bwb7K-7E&t=146s).

Thrift, Nigel, 2007, *Non-Representational Theory: Space, Politics, Affect*, London: Routledge.